

姫宮御前物 太政大臣調進

打敷 裏濃蘇芳浮織物

御臺六本

〔玉葉〕承久二年十一月五日辛卯、此日皇太子懷成(仲恭)三歲御著袴也。○中被奉御膳具、御著袴了可レ供ニ御膳
進之流例也。○中略 御臺六本面朱漆不薄之、正治例也。代々自内裏被奉御膳多藤鶴松今度有儀如之。

食床

〔倭名類聚抄十六器〕食床 方言要目云、食床、盛_フ食床也、長

〔台記〕仁平二年正月廿六日壬戌、今日於東三條再行大饗、初度器戊日也。廿七日癸亥撤尊者已下辨已上膳、略中

懸盤

〔饗膳〕前一日中略同者車副牛飼座居饗車副座用机、本家車副役送牛

〔運步色葉集賀〕懸盤

〔枕草子〕人のいへにつきぐしき物かけばん

〔庭訓往來〕懸盤○中鐵輪以下進注文悉以借預者可進使者也。

〔筆の靈前篇六〕類聚雜要抄に盤の數を七枚と云るが如く、盤を多く用る時は、臺も多く用ふべき事、雜要抄の圖の様にてしるべし、臺一に盤一を置いて、其上に窪一を居ればなり、然るに臺大きくて盤は別に無く、直に窪を多く居れば、多の臺を用ひず、其臺やがて盤の用をもかくる意なるによりて、其を懸盤と云へるなり、其臺と盤との二用をかけたる義にて付し名なり、延喜木工寮式には、懸案といへるがありて、そは分書に長五尺八寸、廣一尺八寸、高二尺五寸、左右著刃長各八尺といへり、是懸盤の本の名なり、世の常の物食ふつくゑにくらぶれば、いと大くて、數箇の用を一にてかけたれば、然はいへるなり、また官名の兼官なるを、云々の云々をかけたると云ふ言づかひ、假字ともに見えたり、それと同じく、臺の用をもかけたる盤なれば、かけ盤といふなり、

懸盤製作

〔厨事類記〕懸盤□□□鶴松摺貝
□□御產御膳用楓木、螺鈿白金物、面弘横一尺一寸八分、面豎一尺五分、厚三分、裏下端丸
樣可削之